

第1回呉市教科用図書選定委員会 会議録

日時	平成29年6月5日(月) 9:00~11:00			
場所	呉市役所7階 754会議室			
参加者	呉市立小学校長会長	藤井 敏彦 (呉中央小)		
	選 定 委 員 会	保護者代表	山本 浩司 長井 久美	
	学識経験者	吉長 成恭		
	校 長	前田 直子 (坪内小)	西村 正順 (荘山田小)	
		高橋 智子 (音戸小)	片岡 邦夫 (港町小)	
		芳川 雅行 (郷原小)	仙田 和子 (昭和北小)	
		山高 正樹 (広小)	堀田 由美 (本通小)	
		藤平 高憲 (安登小)	山下 伸一 (阿賀小)	
		教 育 委 員 会 事 務 局	教育部長	寺本 有伸
	学校教育課長	高橋 伸治		
学校安全課長	金本 康司			
学校教育課課長補佐	安部 ほずみ			
学校安全課課長補佐	栩田 隆志			
学校教育課主任指導主事	川原 亜弥			
学校教育課指導主事	田村 峽平			
傍聴者	なし			
内 容	1 平成30年度使用教科用図書(小学校「特別の教科 道徳」)の採択の手順及び選定委員の任務等について 2 議事 (1) 委員長及び副委員長選出 (2) 教科用図書の調査・研究の観点等について			

委員長選出までの司会を川原主任指導主事が行うこととし、委員会は定刻に始まった。

◎ 呉市教育委員会寺本教育部長の挨拶

- ・教科用図書の採択について
- ・教科用図書採択に係る誤記等と改善策について
- ・選定委員会の今後のスケジュールについて
- ・情報の公開について

平成30年度使用教科用図書(小学校「特別の教科 道徳」)採択の手順及び選定委員の任務等について資料に基づき、川原主任指導主事から説明があった。

(1) 委員長及び副委員長選出

委員長及び副委員長の選出を行った。立候補者がなかったため、事務局より小学校長会長の藤井校長を委員長に、保護者代表の山本さんを副委員長に推薦し承認された。

(2) 教科用図書の調査・研究の観点等について

司会を委員長に交代し、教科用図書の調査・研究の観点等についての議事に入った。

◎ 事務局提案

安部学校教育課課長補佐より、「調査・研究委員会に示す「特別の教科 道徳」の観点について、広島県教育委員会が定めた『平成30年度に義務教育諸学校で使用する教科用図書の基本方針について』に準じて作成し、広島県教育委員会が示す5つの観点と同一のものとする」と提案があった。

◎ 観点についての質疑応答

・山高校長

観点「基礎・基本の定着」について、道徳科における「基礎・基本」をどのようにとらえているのか。

・安部課長補佐

道徳科の目標は「道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とあり、「道徳的価値についての理解」を「基礎・基本」ととらえている。また、これまでの各教科の採択において、「基礎・基本の定着」の視点として、「目標の示し方」や「理解を深めるための工夫」等が挙げられてきた。道徳科における「目標」は「主題」や「ねらい」にあたるため、「主題の示し方」や「ねらいに迫るための発問の示し方」を調査していくことで、それぞれの教科書が基礎・基本の定着を図るために、どのような特色を出しているか研究することができるのではないかと考えている。

◎ 事務局提案承認される。

続いて調査・研究委員会に示す「特別の教科 道徳」の観点及び視点、方法について、道徳部会代表山下校長から原案の説明を行った。

山下校長の説明後、観点毎に質問や修正等に関する意見を受けた。

・西村校長

視点①の「オリエンテーション」は、視点⑨の「巻頭」に当てはまるのではないかと。

・山下校長

「オリエンテーション」は、確かに「巻頭」部分に位置しているが、「道徳科の学び方」を示すことは、道徳科の「基礎・基本」にあたる「道徳的価値の理解」を深める上で、より効果的である。したがって視点①では、「オリエンテーションのページの示し方」、視点⑨では、「オリエンテーション」以外の「巻頭」について調査・研究する。

・藤井校長

「オリエンテーション」と「巻頭」を区別して吟味していくということである。

・山高校長

視点③で「発問の数」を調査・研究するということが、ねらいに迫る授業にする上で「発問の数」は関係あるのか。

・山下校長

基本的には、発問の内容が重要であるが、授業構成上、どのくらいの数をもって授業をつくっていくかは大切である。数については、調査・研究委員会が調査・研究したことをもとに、選定委員会で審議していただきたいと思う。

・山高校長

内容等も含めてということか。

・山下校長

はい。

・藤井校長

記載箇所や数と示してあるので、具体例を含め内容についても審議していただくということである。

・片岡校長

資料がとても大切である。ある出版社はAという資料、ある出版社はBという資料を使っている。そのことを検討するとなると②になるのか。

・山下校長

観点「主体的に学習に取り組む工夫」の⑥や今回、特にいじめの問題に関わる内容をしっかり学習するとなっていることから視点⑧だと考える。主題を絞って見ていくことで教科書会社の特色が出ると考える。

・藤井校長

主題ごとに資料を吟味していくことで違いが分かっていくということである。

・西村校長

視点④について、道徳科における「問題解決的な学習」とは、どのような学習ととらえればよいのか。

・山下校長

「問題解決的な学習」とは、道徳的な問題について、「なぜそのように考えたか」といった根拠を問う発問や、「自分だったらどうか」と自分にあてはめて考えさせる発問、「真の友情とは何か」といった道徳的価値の意味を考えさせる発問などによって、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる学習である。

・藤平校長

関連して質問するが、④では問題解決的な学習、⑧では、現代的な課題と記載されている。広島県では「課題発見・解決学習」が大きな学習の流れとなっている。道徳でも「課題発見・解決学習」を重ねるような学習展開が求められているのか、問題と課題を区別して学習をするのか、そのあたりを整理しながら教科書選定をしていかななくてはいけないのではないのか。

・山下校長

道徳においても問題を自分のものとしてとらえることで主体的な部分が含まれている。「自分だったらどうだ。」「自分の体験を基にして考え発言する。」など、このような発言が出ることが主体的な学びととらえている。現状の呉市における道徳教育では、そのようなことができて実態もあると思っているが、このことを指導者が更に意識してやっていくことで主体的な学びについて議論できると考えている。

・藤平校長

問題と課題の区別がついているのか。算数科などではついているが。

・山下校長

道徳の場合は、生活場面、価値に対する場面を問題として自分で考えていくこととしてとらえ、学習のねらいという課題は授業で示すものではない。しかし、内容項目を示した授業も見受けられる。そのあたりが新しい方向である。

・藤平校長

現象面としてあらわれるものが問題であり、その問題を解決するために自分としてとらえるのが課題であろう。今、自分たちの目の前にある現象を自分たちで解決するために自分としてどう考えるかが課題でいいのか。⑧には現代的な課題と示されているが整理した方がいいと思うのだが。

・藤井校長

情報に関することも現代的な課題として入ってくると思うが、④では問題場面での発問例という言葉があり、⑧では現代的な課題等、問題だとか課題だとかねらいとか文言が出ている。これはいろいろな教科で吟味、追究しなければいけないことであり、このことをしっかり踏まえながら進めていかななくてはならない。

・西村校長

視点⑤について、道徳科における「体験的な学習」とは、どのような学習ととらえればよいのか。

・山下校長

体験的な活動もこの度の改訂で重視されている。実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど具体的な道徳的行為をして、礼儀のよさや作法の難しさなどを考える学習であったり、その教材に登場する人物等の言動を即興的に演技して考える役割演技など疑似体験的な表現活動を取り入れた学習であったりする。具体的な道徳的行為や役割演技などを通して、道徳的価値の意義や実際の問題場面において、実感を伴って理解する場面のある学習ととらえている。

・芳川校長

教科書の中にそのような場面を意図的に設定しているかどうかであろう。

・吉長教授

主体的というアクティブラーニングと言われるが、問題解決、要するに問題がまずあってそれに対して主体的に学習に取り組む体制を教員が教育場面で使おうとする。主体的に学習するというのは困難な課題に自ら取り組むのもあるが、本来、自分に興味があることに対してそれが問題であろうが楽しいことであろうが主体的に取り組む姿勢が子供たちにある。問題解決は社会的に必要であるが、子供たちの興味が湧くような、湧いているものを引き出すような、興味を中心に引き出して道徳的価値を深掘りする機会にするのであればインタレストオリエンテッドラーニングである。こういった内容が教科書にちりばめてあると主体的学習の機会が増えるのではないか。

・山下校長

道徳は資料を中心にやってきた。個々の子供たちの生活体験が違うのでそれをベースにして自分の考えを出し合っている。したがって、その資料が子供たちの生活に近いものが考えやすい。子供たちが場面を想定しやすいもの、経験したことがあることが入ることによって興味・関心が近づくのではないか。

・吉長教授

是非、⑥の実生活に生かすような教材に留意してほしい。

・片岡校長

価値項目によっては実生活に結びつきにくいものもあると思うが、どうか。

・藤井校長

そういったことについても、5つの観点でそのあたりを見ることができるとか必要になってくる。

・高橋校長

視点⑦においては、教科書の「判」を調査するとのことだが、意味はあるのか。

・山下校長

教科書の大きさによって、文字の大きさや紙面のゆとり、写真やイラスト等から受ける印象も変わってくるため、読みやすさや内容の理解にも違いがでてくると考えられる。

・山高校長

視点⑧について、「現代的な課題等」にはいろいろあると思うが、「いじめ」に限定して調査するということか。

・山下校長

「学習指導要領」では、「現代的な課題」として、「生命倫理」の問題、「社会の持続可能な発展」等をあげている。今回、教科書改訂の主要として、いじめ問題に対してどのように学習を組んでいくか、子供たちを育てるかがあるので、とりわけ、いじめについて各社において工夫されていると聞いている。ここでは、「いじめ」に限定して調査していく。

・山高校長

「いじめ」に限定ということでもいいか。

・山下校長

絞っていきたいと考える。

・芳川校長

現代的な課題等となっても、方法では「いじめ」に限定されている。「いじめ」に特化されてしまう。

・片岡校長

「情報モラル」も重要な課題である。

・藤井校長

いじめ問題はどうしても大きな問題であるが、⑧の視点では現代的な課題等、方法ではいじめに関する教材等ということ等で等いろいろなことが含まれていると思うのだが。

・芳川校長

現代的な課題等といえば色々なことが考えられる。「いじめに関する教材等」よりは「いじめ等に関する教材」ではいけないのか。

・山高校長

そうすると、現代的な課題は多岐にわたりすぎるのではないか。今回の改訂の趣旨を「いじめ」ということを出すことで確かめるということではないか。

・西村校長

今、教科書を見せていただいたが、「いじめに関する教材等の数」とあるが、どれに当てはまるのか分かりにくい。

・吉長教授

今回の改訂の大きな趣旨は「いじめ」ということか。

・山下校長

いじめ問題に対して子供たちに指導する上では道徳が重要になってくる。

・吉長教授

他には社会的・現代的な課題はないのか。

・山下校長

現状で言えば1番は「いじめ」である。

・吉長教授

具体的なテーマとして「いじめ」にフォーカスが当たっている状況なのですね。検討するときに幅が広がるとカウントするとき苦渋を強いられてしまうのではないか。

・藤井校長

1つの観点で1つのものを示すことは問題であるのかもしれない。全体的に見ていくということで、等という表現がされているのではないか。みなさん御意見はないか。

・芳川校長

「いじめ」は特に重点的にやっていくが、それ以外にも工夫されている点を付記していったらどうか。

・山下校長

「いじめに関する資料」はどの教科書にも複数掲載されている。教科書会社がどこに重点をおいているかよく分かると思う。「情報モラル」についても分かりやすい。しかし、キャリア教育や国際理解教育については、分かりにくいところもあり、項目を絞った方が調査がやりやすいと考えている。

・吉長教授

具体的には「いじめ等に関する教材の数」というふうにするのか。視点の現代的課題等に合わせるとそうなると思うが。

・前田校長

この記述では、教材の数ととらえてしまう。

・藤井校長

現在の記述では、方法では「いじめ」に特化した形で調査するということになる。

⑧については、最後に論議したいと思うが、いかがか。

・藤平校長

⑩の方法について文字を入れなくてもよいのか。

・藤井校長

判のところで文字について触れているが、図表等に文字を含めるということではよいのではないか。

・藤平校長

「話し合いを促す」とあるが「対話を促す」ではいけないのか。

・山下校長

道徳のキーワードは議論だが。

・藤井校長

発達段階を踏まえた文言にするのか、道徳のねらいに沿った文言にするのか。意見を願います。

・仙田校長

対話とは広くとらえることができる。議論というより話し合いではないかと思う。

・山下校長

議論を入れることで道徳の意図は伝わると思う。

・片岡校長

価値項目によっては議論することが難しいこともある。

・吉長教授

ディベートのようなレベルは6年生ではどうなのか。

・前田校長

国語の教科書（5年生）でディベートについて学ぶが、手法を学ぶ程度である。

・西村校長

促す工夫となっているが工夫とは何か。

・山下校長

教科書の中で示されているものもある。方向性が見えるものもある。教科書の記載の上で工夫されているのかを見るものである。自分の問題として話し合えるかということが問われている。

・藤井校長

話し合いについては、このままでいく。

・藤井校長

その他（⑧以外）であれば、意見を願います。

・吉長教授

道徳の内容項目が22項目と言われたが、1年から6年までで22項目ということか。

・山下校長

1・2年生が19項目、中学年が20項目、5・6年生が22項目である。

・吉長教授

それは、指導の中に1年生にはこの項目と決まっているわけではないであろう。よって、教科書会社はそのことを踏まえて年次配当していてそれを逸脱したものはないというところではよいのか。

・山下校長

検定を通過している教科用図書なので逸脱したものはない。

・吉長教授

教科書は通学に持ち運ぶものなのか。学校に置いておくものなのか。

・山下校長

通常持ち帰りである。道徳はこの度から分冊があるものがある。読み物編と活動編。2つとも教科書という会社が3社ぐらいある。

・高橋校長

教科書が導入された場合、これまで授業の中で活用していた「私たちの道徳」は、どのような扱いになるのか。

・山下校長

教科書が導入されると、「私たちの道徳」の国からの無償配付は終了となる予定である。なお、文部科学省ホームページには引き続き掲載される予定なので、必要に応じてダウンロードして活用することは可能である。

・高橋校長

教科書が配付されると、呉の道徳自作資料集等は使えなくなるのか。

・山下校長

教科書は主たる教材として使用するべきものだが、「学習指導要領解説」には、「各地域に根ざした地域教材など、多様な教材を併せて活用することが重要となる。」と書かれている。したがって、「呉の道徳自作資料集」を活用したり、各学校で作成した自作資料を活用したりすることは可能である。

・高橋校長

「呉の子どもたちに適した教科書の採択」をどのようにとらえているか。

・山下校長

全国の子供の実態を踏まえ、道徳の「特別の教科化」を進めているが、その「具体的なポイント」として、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善することや、問題解決的な学習、体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫すること、児童の道徳性に係る成長の様子を把握すること等を示している。呉市では、小中一貫教育の取組を基盤とし、これからの新しい時代を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指して主体的な学びを促す教育活動を展開しており、国の方向性と合致している。このことを踏まえて、お示しした視点や方法に沿って、呉市の子供たちに適した教科書を選定していく。

・藤井校長

それでは、⑧の観点に戻る。文言についてもう少し考える。

現代的な課題等を踏まえた内容の示し方という視点において、方法ではいじめに関する教材等の数、教材名、内容項目ということで吟味するということが、「いじめ等」や「いじめに関する教材等」など「等」の位置で意味が変わってくるのではないかと。どちらがこの場にふさわしいか考えることになった。いかがか。

・山下校長

心配なのは、いじめは確かに見られているが情報モラルという問題がないというのは偏った見方になってしまうのではないかと。しかし、現代的な課題について全て網羅されているか、それをチェックすることは大変である。おもに、今回の改訂で議論になったものについては、基本的には「いじめ」を見ていながら情報モラルの必要性も感じる。

・藤井校長

「いじめ」等に関するとしていいか。

・山下校長

情報モラルも全部入っていると思うが。

・藤井校長

情報といじめは必ず入っていると思う。

・藤平校長

不審者対応の安全とか自然災害も課題など、これらも全部入っているのか。

いわゆる自分の命を守るといったことだが。

・山下校長

具体的な教育課題として道徳の学習指導要領解説では食育、健康教育、消費者教育、防災教育、福祉に関する教育、法教育、社会参画に関する教育、伝統文化教育、国際理解教育、キャリア教育などと記されている。それらの前に情報モラルが特別枠で囲まれている。

・高橋校長

どこにも入っているのはいじめか。

・山下校長

今回の改善に関する議論の発端になったのはいじめ問題である。

・高橋校長

課題はたくさんあるが「いじめ」に関しての資料比較が必要ではないか。

・片岡校長

伝統文化も大事だと思うのだが。呉はやはり日本遺産である。そこの絡みで学習できるようなものが必要だと思う。しかし、そうなるとどんどん広がってしまう。

・芳川校長

日本遺産といえば、呉市としては教材化を図る取組があるので、ここで取り上げなくてもいいのではないか。

・藤平校長

「いじめ」だけに特化せず、「いじめ」と「情報モラル」にしたらどうか。たくさんあると比較は難しいが、「いじめ」と「情報モラル」に絞ったらよいのではないか。

・仙田校長

コラムのようなものもあるので、いじめ等でいいのではないか。

・藤井校長

「いじめ」と「情報モラル」に絞って選定してよいか。視点⑧は現代的な課題等を踏まえた内容の示し方。視点⑧の方法については、「いじめ・情報モラルに関する教材等の数、教材名、内容項目」とするということがよいか。

・片岡校長

はい。

・芳川校長

観点も全部公表される。説明できるようにしておく必要がある。

・藤井校長

はい。

ではもう一度確認する。視点⑧は「現代的な課題等を踏まえた内容の示し方」、視点⑧の方法については、「いじめ・情報モラルに関する教材等の数、教材名、内容項目」とするということがよいか。

・全員

はい。

・片岡校長

呉の子供たちのキーワードは夢であると思う。教材の中に夢がもてるような内容が必要である。視点⑥に入れ込んでよいか。

・全員

はい。

・藤井校長

全体でも構わない。御意見はないか。

・山本会長

最近、親同士、子供同士における問題が多く見受けられる。親子で道徳ができないか。宿題で

は難しいかもしれないが、学習したことを家に持ち帰って親子でできる話合いや参観日での特別授業になりうるものであると考える。保護者は、子供のかがみとして行動しなければいけない。子供は親の姿を見て育っていく。親が間違った方向に進めば、子供も間違った方向に進んでしまう。道徳を使って親子での勉強、授業を行ってほしい。何冊か教科書を見させてもらったが、親子で考えてほしい内容もあったので親子で考える場面を仕組んでほしいと思う。

・山下校長

教科書になるので確実に学校と家との往復がある。今、言われたことが可能になると思う。

・吉長教授

呉を背負っていく子供たちにとって生きるということに対して礎になる道徳の教科書選定はとても大切である。平成28年度の選定から改善策が出され、これに基づいて公平性、公正性、透明性を担保しながら教科書選定に臨んでいきたい。本日は、特に調査・研究の観点において検討したが、これは今後、選定委員会の開催の原理原則になると思う。これから大変な作業が推測されるがよろしく願います。

・藤井校長

今回の小学校「特別の教科 道徳」の観点等に関しては、一部修正したものを調査・研究委員会へ示すということで進めていきたいと思う。承認される方は拍手をお願いしたい。

・全員

(拍手)

承認を得て協議を終了した。

川原主任指導主事が次回以降の予定について確認して、会を終了した。

第2回呉市教科用図書選定委員会 会議録

日 時	平成29年8月7日(月) 9:00~11:00		
場 所	呉市役所7階 754会議室		
参加者	呉市立小学校長会長	藤井 敏彦 (呉中央小)	
	選定委員 保護者代表	山本 浩司 長井 久美	
	学識経験者	吉長 成恭	
	校長	前田 直子 (坪内小)	西村 正順 (荘山田小)
		高橋 智子 (音戸小)	片岡 邦夫 (港町小)
		芳川 雅行 (郷原小)	仙田 和子 (昭和北小)
山高 正樹 (広小)		堀田 由美 (本通小)	
藤平 高憲 (安登小)		山下 伸一 (阿賀小)	
教育委員会事務局	学校教育課長	高橋 伸治	
	学校安全課長	金本 康司	
	学校教育課課長補佐	安部 ほずみ	
	学校安全課課長補佐	栩田 隆志	
	主任指導主事	川原 亜弥	
主任指導主事	久保 由佳利		
傍聴者	教育長職務代理者 森尾 啓介 教育委員会 委員 水野 良行 教育委員会 委員 香川 治子 教育委員会 委員 船尾 慎		
内 容	1 第1回選定委員会での協議の確認 2 議事 (1) 平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見(案)について		

委員会は定刻に始まった。

1 第1回選定委員会での協議の確認

・藤井校長

審議に入る前に、第1回選定委員会での協議について確認をする。このことについて、事務局から説明をお願いします。

◎ 事務局説明

安部学校教育課課長補佐より、第1回選定委員会の協議結果を確認した。協議内容は、委員長及び副委員長選出と教科用図書の調査・研究の観点等についての2点である。

1点目について、委員長には、藤井校長が、副委員長には保護者代表の山本さんが選出され、決定した。

2点目の教科用図書の調査・研究の観点等については、調査・研究委員会に示す特別の教科 道徳の観点について「広島県教育委員会が示す5つの観点と同一のものとする」と提案し、議決された。そして、調査・研究の視点及び方法について、質問や意見をいただき、3つ目の観点「内容の構成・配列・分量」の視点⑧「現代的な課題等を踏まえた内容の示し方」について、方法に「情報モラル」を加えて、「いじめ・情報モラルに関する教材等の数、教材名、内容項目」にするということに議

決された。

また、6月9日（金）に開催した第1回調査・研究委員会において、この観点、視点、方法及び第1回の選定委員会での貴重な御意見について、道徳部会代表の山下校長から、委員の先生方に説明したことも併せて伝えた。

◎ 事務局の説明について、質問や意見はなし。

続いて、これまで行われた調査・研究委員会についての報告を、事務局から行った。

◎ 事務局報告

調査・研究委員会について報告する。第1回は、6月9日（金）に行い、教科用図書の採択の手順及び調査・研究委員会の任務等の説明を行った。その後、「特別の教科 道徳」部会で、選定委員の山下校長が選定委員会で決定した観点等について、報告書を作成するための調査・研究の進め方を説明し、役割分担を行った。

第2回の調査・研究委員会は、6月23日（金）に開催した。第2回では、役割分担した箇所について、各委員が調査・研究した内容について見本本と照らし合わせながら協議し、加筆修正する箇所等を確認した。

第3回の調査・研究委員会は、7月24日（月）に開催した。第3回では、第2回以降加筆・修正した箇所について協議し、主担当者が加筆・修正した資料を、誤字・脱字も含めて副担当者が確認した。その後、調査・研究委員会道徳部会代表の松浦校長から、7月27日（木）、選定委員長藤井校長に報告書が提出された。その報告書をもとに、道徳部会代表の山下校長が、総合所見の原案を作成してくださっているので、この後提案していただく。

◎ 事務局の報告について、質問や意見はなし。

2 議事 平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見（案）について

◎ 調査・研究委員会から提出された報告書をもとに、道徳部会代表の山下校長が作成した総合所見の原案について検討した。まず、総合所見の様式等について、事務局から説明を行った。

◎事務局説明

「平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見（案）」を御覧いただきたい。

道徳の教科用図書は、全部で8つの発行者から発行されている。選定委員会から調査・研究委員会に示した5つの観点ごとに、その特徴をまとめて記載していただいている。すでに評価の案が入ったものもあるが、観点ごとに、「特に優れている」と考えられるものに「◎」、「優れている」と考えられるものに「○」を付けていただく。

以下同様に、8つの発行者についてその特徴を記述し、観点ごとに優れていると評価できるものに印を付けていただく。また、総合所見の後半に、A3判の資料が付いている。これは、A4判に記載されていることを、視点ごとに見られるようにしたものである。参考にさせていただきたい。

◎ 事務局の説明について、質問や意見はなし。

◎ 総合所見（案）についての資料を、30分間各自読む。

◎ 総合所見（案）についての説明・質疑応答

・山下校長

「特別の教科 道徳」の総合所見（案）について説明する。はじめに、お願いと確認がある。総合所見（案）は、発行者ごとに観点で並べている。説明用資料のために、A3資料も用意した。内容は、同じ。A3資料の右端に評価があるのは、観点ごとの評価である。説明の中では、視点ごとに8社比べたときにどうかという説明をする。もしメモするのであれば、メモをしながら聞いていただきたい。発行者を略称で説明する。途中で見本本を開いてもらうことがある。全ての学年を開きたいところであるが、教科用図書を全て使用して説明するのは煩雑になるので、第5学年の教科用図書を中心に説明する。御準備いただきたい。調査研究委員会から提出された調査研究報告書をもとに、総合所見の案を作成している。総合所見（案）では、5つの観点から分析している、特徴がよく分かる観点2、観点3、観点5について説明する。なお、説明の中で視点ごとの特徴の違いについてもふれるので、必要であれば、お手持ちの資料に書き込んでいただきたい。

まず、観点2「主体的に学習に取り組む工夫」について説明する。

視点④「問題解決的な学習を取り入れた工夫」について、児童が自ら進んで考えてみようという気持ちになるような工夫があり、学習の見通しがもてるものがよいとの考えから、東書、日文、学研を「優れている」とした。例を示す。日文の70、71ページには、「学習の手引き」がある。はっきりと問題を示し、その問題について話し合い、問題解決するために話し合うという焦点化を図った取組がされている例である。東書の25ページには、きまりや約束という視点をはっきり明確にしている。29ページの「考えるステップ」として、考える上での整理が示されていて、児童の主体的な学び、問題について考えていくのにふさわしいのではないかと考えている。

視点⑤「体験的な学習を取り入れた工夫」については、役割演技や動作化を取り入れるなど、体験的な学習を効果的に位置付けることで、児童の道徳的価値の理解は一層進むとの考えから、教出、光村、日文を「優れている」とした。例を示す。教出の34ページに「学びの手引き」がある。ここでは、二人組になって役割演技をするという例が出ている。具体的に取り入れることによって理解が深まるのではないかと考えている。

視点⑥「自己の生き方につなげるための工夫」については、実生活に生かすための具体的な働きかけがあると、自己の生き方につなげて考えやすいとの考えから、東書、学図、光村、日文、光文、学研を「優れている」とした。例を示す。日文の94、95ページに「心のベンチ」がある。自分たちの生活につながる部分、地域性につながる部分もあり、自分たちの課題として考えるのではないかと捉えている。学研の54～57ページには、内村航平選手が取り上げられている。スポーツの話である。スポーツに取り組むという点において、子供たちにとっては考えやすいと捉えている。

以上のことから、観点2については、日文を「特に優れている」、東書、光村、学研を「優れている」とした。

次に、「内容の構成・配列・分量」について説明する。

視点⑦「分量や内容項目の数」については、発行者によって判の大きさや別冊の有無に違いがある。後で、ここはしっかり協議していただきたいと考えているが、案としては、児童にとって判の大きさが扱いやすいことと、発問に対して書き込む欄等が示されている別冊がない方が学習展開や年間指導計画を柔軟に設定しやすいのではないかととの考えから、東書、教出、光文を「優れている」とした。別冊については、学図、日文、あかつきに示されている。

視点⑧「現代的な課題等を踏まえた内容の示し方」については、各学年で「いじめ・情報モラル」に係る教材をバランスよく設定している方が望ましいとの考えから、東書、学図、光文、学研を「優れている」とした。東書は、37ページから44ページまで「いじめのない世界へ」として、いじめを重点的に扱っている。また、情報モラル164～166ページは、チェーンメールを扱っている例である。情報モラルをはっきり示していることが特徴である。光文のいじめについては、37ページ。「広い心で互いを認め合おう」というふうに、重点的に資料を取り扱っている。情報モラルについて、62ページに、はっきりと示してある。

以上のことから、観点3においては、東書、光文を「特に優れている」、学図、教出、学研を「優れている」とした。

最後に、観点5「言語活動の充実」について説明する。

観点⑩「自分の考えを伝え合う活動の工夫」については、「考え・議論する」道徳の時間にしていくために、それぞれの教材に話し合いを促す発問や活動が示してあると効果的に話し合い活動を進めることができるとの考えから、学図、教出、日文、光文、学研を「優れている」とした。日文の152・153ページ「学習の手引き」にあるように、話し合いをしていく手順がしっかり示されている。考え・議論する「道徳」に導くものであると考えている。光文の111ページの最後に表があるが、自分の回りにカードを書き足してみるという活動である。115ページには帰りの会で紹介しようなど発展的なものを取り入れている。

観点⑪「自分の考えをまとめたり、振り返ったりする活動の工夫」については、振り返りの回数や時期など工夫は発行者によって様々だが、案としては、学期に1回程度の振り返りがあれば、児童自身がその成長に気付きやすいのではないかと考えている。東書、日文、光文を「優れている」とした。東書の167～169ページには、学習の振り返りがある。学期ごとに整理できるようになっている。日文は、別冊「道徳ノート」の2ページに、「今日の学習はどうでしたか」などの授業ごとの評価がある。41ページの最後には、道徳について学んだこと、心に残ったこと・その理由、保護者の記入欄も設定されており、活用できる。

以上のことから、観点5においては、日文、光文を「特に優れている」、東書、学図、教出、学研を「優れている」とした。

なお、観点1、観点4についての評価は、他の観点と同様に、「特に優れている」は◎、「優れている」は○で示している。

山下校長の説明後、質問や修正等に関する意見を受けた。

・片岡校長

観点ごとの比率は同等と捉えてよいか。

・山下校長

5観点は、それぞれ大切なものが示されている。5観点の傾斜等は考えていない。ただし、最終的に同等になった場合は、議論が必要ではないかと考えている。

・藤井校長

同じ比率で考えていくこととする。ただし、重点化する必要が出てきた場合は、考えていくこととする。

・高橋校長

観点3の⑧「いじめ・情報モラルに関する教材等の数、教材名、内容項目」のところだが、「いじめ・情報モラル」については、どの発行者もそれぞれの工夫のもとで必ず取り扱われていると思うが、発行者ごとの扱いでどのような特徴が見られるのかももう少し説明していただきたい。

・山下校長

いじめについては、発行者によって教材数の差はあるが、どの発行者も同じように大事に考え、教材が準備されている。例えば、東書は「ユニット」という形で、いじめの題材をまとめて並べている。色々扱いがあるが、直接いじめの事案を扱ったもの、これをやるといじめになるだろうという生活場面を捉えたものなど、違いはある。どちらがいかかという、どちらも学習のねらいがあるので、活用できると思う。かなり教材数が多いものについては、本来これまではいじめではなかったというものも、これもいじめにつながるという観点で、教材数が増えていると捉えている。いじめについては、コラムを用いて、「～な場合はどうだろうか」など、組み合わせで深く考えさせる特徴もある。

・西村校長

「ユニット」とは、一つのかたまりのようなものでいいのか。発行者によって、特徴的なものということか。どの発行者にそれが組んであるのか。

・山下校長

一つのかたまりのようなものである。東書、光村、日文、光文、学研である。

・藤井校長

「ユニット」をよく見てみると、全学年においてという場合とある限られた学年にという場合もある。そういったところもよく見ていただきたい。

・片岡校長

「ユニット」については、まとめてやった方が指導の効果があると発行者の意図があると捉えていいということか。年間指導計画を作る際に、学校によっては、学期ごとに振り分けるという場合もある。この教科書どおり順番にやるかどうかということについては、学校の裁量であると考えているが。

・山下校長

学校によって、年間指導計画を作るときにユニットはばらしてもいいし、やはり重点的にやりたいという時期があれば、入れ込むことも可能だと思う。

・藤井校長

指導方法によって、各学校で工夫ができると考えていただきたい。

・山高校長

観点2の④「問題解決的な学習を取り入れた工夫」について、発行者でそれぞれ取り扱っているようだが、特にどのようなところに違いがあるのか、もう少し説明していただきたい。

・山下校長

問題解決的な学習については、今回の教科化にあたって、学習方法を取り入れることが示されている。どの発行者においても問題解決的な学習というものが扱われている。違いとしては、学習展開がきちんと示されているかどうか。主には、問題を出して話し合っていくのだから、展開の仕方を示した方が、指導する教師、子供にとっても見通しを持って学習できるのではないかと、ということで学習展開があった方がいいのではないかと考えている。

・山高校長

評価された発行者については、そのあたりがなされているということか。

・山下校長

そうである。

・芳川校長

観点2の⑤「体験的な学習を取り入れた工夫」について、役割演技等は、どの発行者も扱われているが、「特に優れている」「優れている」になるのは、どこが境目か。

・山下校長

これまでは、役割演技と動作化という言葉でいわれていたが、それを含めて今回から「体験的な活動」ということで、各教科に入れるよう明記されている。どの発行者もとりわけ低学年については、動作化が入っている。各発行者で工夫されていると考えているので、教科書の中にはっきり示されているかどうかをみた。

・西村校長

観点2の⑥「自己の生き方につなげるための工夫」について、先ほど具体的に日文の95ページの説明があったが、少し分かりにくかった。「米作りから、ちいきのことを考えよう」「日本全国のちいきブランド米」とあるが、なぜ「自己の生き方につなげるための工夫」「実生活に生かすような教材等の具体例」になるのか。

・山下校長

日文は、「心のベンチ」が所々示されていて、資料に結びつくようなものが示されている。この95ページには確かに広島はないが、それぞれ自分たちの地域につながるということでいくと、問題を自分たちの生活につなげやすいと考えている。そのほか、全国的に有名な地域を色々のせて、それにつなげて考えていくものもある。全国版であるから端的に広島のことをいうものでは

ないが、身近に近づけていくようなものを配置しているということだ。

・高橋校長

観点5の⑩「自分の考えをまとめたり、振り返ったりする活動の工夫」について、教科になるということで、評価も重要なことかと思う。振り返りについて学期ごとの振り返りや毎時間の振り返りという形があり、発行者によって違いがある。先ほどは、学期ごとの振り返りを勧められていたと思う。教師の評価と関わっていくとなると、毎時間の評価も必要かと思うが、それを振り返りとして教科書の中に書いていくというものの方がいいのかとも思うが、振り返りについては、どのような形で行うことを考えているのか。

・山下校長

振り返りなので、1時間ごとや学期ごと月ごとなどの振り返りがあると思うが、このことが道徳科における評価に関わっていくとなると、大事な問題であろうかと思う。評価に関わっては、個々の内容項目ではなく、大きくくりな評価というものを国は求めている。ただし、授業であるので、評価はしていくことになる。毎時間きちんと書いていくような評価と学期でまとめたものという評価もある。授業の流しとして「最後に今日の道徳はどうだった」ということは必要である。しかし、それぞれ全部書いてあるものは、負担になる部分もある。授業の流しについては、大きく学期に1回程度しっかり書いたものがあれば、子供の変化も見取ることができると考えて、評価した。

・高橋校長

それぞれワークシートや道徳ノートを使うなりして、担任の工夫が入ってくるということではないか。

・山下校長

そうである。

・芳川校長

ここは評価といっても言語活動の充実の観点であるから、簡単に○とかではなく、しっかり自分の言葉で表現しているかどうかを見る視点が必要である。

・山下校長

評価つまり成績にかなり直接的につながっていく部分もあるから、評価の在り方をしっかり意識しておいていかななくてはいけないと思う。

・藤井校長

評価についても今後も大切な部分である。毎時間で評価できる部分と、少し長いスパンで評価していく部分が必要であろうということで、学期に1回振り返ることが確実になされていることが大切ではないかと説明を受けた。

・西村校長

観点1のところは説明がなかったが、中でも③の視点で、発問の数とか記載箇所とか、それぞれのどのような違い・特徴があったのか。

・山下校長

「ねらいにせまるための発問の仕方」ということで、どうしても道徳の学習において、発問は大事である。発問例を示すことで、子供たちは課題意識をもって教材に接することができるようになると考えている。発問例は示されて良いと思っている。

特にキャラクターを使って、それが語るというものもあるし、中には教材文の下に入れて示す、あるいは枠を作って全て示しているものもある。例えば、あかつきの20ページに「学習のみちすじ」とあるが、一番くわしく丁寧な書きぶりである。これもしっかり書かれていていいと思うが、あまりたくさん書くことによって、そのことが縛りになっていくようではいけないと思う。量的にたくさんあるのはいかなものかと思う。2～3問程度書かれることについては、子供が自分で読んで考えていく手助けになると考えているので、数的なものも配慮している。

・藤井校長

従って、所見を見てみると、2～3問程度のところに評価の○が入っている。発問についてはよいか。

・前田校長

それに関連して、観点2の④「問題解決的な学習を取り入れた工夫」について、問題解決的な学習を取り入れた教材だけに特筆して「考えるステップ」などを置いている東書等があると思うが、教出のような「学習の手引き」は、先ほどの発問の部分と重なっている。それで問題解決的な学習を特筆しているものもあるということですよ。

・山下校長

そうである。同じようにつながるものもある。

・藤井校長

会が始まり約1時間半が経過している。一旦休憩し、休憩後のスタートで別冊あるなしの問題提起がある。大きなポイントになることについて、今までのものも見直しておいていただきたい。

(休憩)

・藤井校長

協議を再開する。後半のスタートは、別冊のあるなしについて論議をする。山下校長の提案は、別冊があると、学習計画等において縛られてしまうのではないかと意見をもらっている。全体でそのことについて論議し、御意見をいただきたい。

・山高校長

今回このように教科書が採択されて学校で使うようになるということは、他の教科と同じように教科書を主たる教材として扱うようになる。別冊があると、かえって教師も子供も使い切らないといけないという考えになってしまって、縛りが出てきてしまう。これまでそれぞれの学校や呉市で開発してきた教具やワークシートが活かされにくくなるのではないかと感じている。別冊は必要がないのではないかと考える。

・堀田校長

私も別冊はない方が良く考えている。今までの授業でもワークシートを工夫してきた。別冊を見たが、パターンが一緒なので、ここさえやればよいという授業になりはしないか。呉市の日本遺産を入れると、別冊を使わないことになり、空白になるのもどうかと思う。

・藤平校長

別冊が8社のうち3社扱われている。あかつきと学図は、言われるように縛りが強いように思う。日文については、発問に二つパターンがあり、書く欄に加えて友達の意見を書く欄もある。言語活動の充実や議論について、友達の意見が書けること、振り返りについてもパターン化しており、普段から書きにくい子にとっては書きやすく、書くやり方が分かってくることなど利点もあると思う。別冊を使ったり使わなかったりして良いと最初に決めておけば、別冊ノートだけ集めれば良いと考える。日文については、使ってもいいかと思う。他は使わない方がよいかという思いをもった。

・藤井校長

別冊のあるなしではなく、内容によるのではないかという意見をもらった。

・仙田校長

日文は、視点が明確で子供がステップを踏んで書くことができると思った。しかし、問題解決的な学習を取り入れて、教材文を読んで話し合わせて熟議したり、議論させたりする場合、その時間と書かせる時間配分が心配である。どうしても書かせようと思ったら「読んで書きなさい。」となる授業に陥ってしまう。日文は、全ての時間の反省と振り返りが書いてあるので、ここではしっかり話し合わせて、ここではしっかり書かせてというように軽重をつけるのであれば、これにとらわれない方がよいのではないかと感じた。これまでのワークシートを活用し授業を工夫し

て、この時間はしっかり話し合わせて友達の意見も取り入れよう、この時間は自分の意見をしっかりと書かせてという形の振り返り・評価という形をとっていく方が、主体的な学びに結びつくのではないかと考える。

・藤井校長

書く時間の確保は難しいのではないかとということである。

・片岡校長

藤平校長が言われたように、ノートの扱い方をどう考えるかで、ある程度方向性が決まってくると感じる。教科書の一部として使うのが前提なのか、学校・教師の判断で柔軟に扱っていいのかどうか。

・藤井校長

教科書として別冊が一緒に入っていると、縛りになるのではないかと。活用せざるを得ないような形になるのではないかとという意見であった。

・藤平校長

教科書については、書き込みとして使うということか。教科書に書き込むのはぺらぺらで書きにくく、意味があるのかと思う部分もある。ワークシートは当然授業によって工夫される。ノートに書くか、教科書に書くか、どのように使うかで決まると思う。

・藤井校長

教科書の書き込みもあったし、道徳ノートやワークシートの考え方というものもある。

・藤平校長

シートならシートで統一すればよいと思う。教科書に書くというのは、児童の立場としたら書きにくいのではないかと。

・山下校長

別冊といいながら教科書である。「ノート」や「活動」の名前というものもある。分冊になっている発行者が3社ある。3社でもここまで書くかというものや書くスペースがあまりないものもある。検討の余地がある。教科書ということになると、縛りというものがある。本来ここまで書かせる必要があるのかどうか。これまで呉市の先生方がワークシートの開発をしてきた努力があるので、工夫の余地が十分ある。発問が決まってくるという縛りがあるので、これから授業を創造的に作っていくという上ではなくてもいいという意見があった。

・藤平校長

先生方の授業を工夫するという視点では、発問や書く内容が書いてあるので、縛りが出てくるのかなと思う。やりやすさでいえば、お手頃、お気軽というパターンになる気もするが、内容の充実でいくと別冊はない方がいいのかなと思った。

・高橋校長

別冊については、なくてもよいのかなと思う。今でも副読本だけでなく、先生方が作られた自作資料やこれまでに呉市が作成している3種の自作資料集を活用して良いという話があった。あまりにもたくさんの資料があると、年間指導計画を立てていく上でも難しいところもあるのかなと思う。先生方の力量を高めるという意味においても、これをやっておけばいいと安易に考えることが出てくることを懸念する。

・藤井校長

そのほか、別冊について意見はないか。呉市では、地域教材や学校で開発された教材を使いたいという思いもあるので、別冊はない方が望ましいのではないかとというまとめでよいか。

・全員

よい。

・藤井校長

それでは、別の観点・視点に従って、もうすこし時間をもって協議をしたい。その他のところで御意見をお願いしたい。

・西村校長

書き方の質問だが、例えば観点2の視点④～⑥がある。発行者の欄の右側に、視点「問題的な学習を取り入れた工夫」、方法「問題解決な学習として取り上げている内容項目、問題場面での発問例」とある。

例えば、東書には、「～思考をするための工夫がある」、学図「～記載している」、光村「～促している」という書き方でまとめてある。実際に、内容項目とか発問例の方法を見るとしたら、これでいいのかどうか。ここが分からない。どれが優れているのか、この文面だけでは、根拠となるものにならないのではないか。⑤の視点も同じである。

・山下校長

研究報告書が机上にある。9枚目の観点2の④を見ていただきたい。内容項目、発問例等、調査・研究委員は全て調査をしている。それを特徴的なものとして示しており、その文面を総合所見(案)として採用している。ここまで説明していれば分かるのだが、調査・研究委員は、全発行者の全ての学年を調査している。

・西村校長

一緒に研究報告書があると、なるほどと思う。

・藤井校長

今回資料が3つに分かれて示されている。最初に総合所見(案)が示されたが、一つの観点ごとで分かりやすいように、A3サイズでも整理されている。全てを見るのは大変だが御理解いただきたい。

・前田校長

別冊ノートの話は、一つの結論を見たと思う。やはり教科書になるということで、保護者によっては、どんな学習をして帰ったかとノートをしっかり見る保護者もいる。その中で、別冊ノートまではいかないまでも、その時間の振り返りを学びの記録、学びのあしあととして、どのように残していくか。前回、保護者代表の方もそれを家に持って帰って家の中でも子供と話をしたいと言われた。しっかり学びの記録、足あとを短い言葉でも残していくことが大切ではないかと思う。それを家庭とどのようにつないでいくのかということを考えてみてはどうか。

・藤井校長

指導を家庭につなぐということ論議してみたいということである。保護者代表の方で、日頃感じていることがあれば、話していただきたい。

・山本委員

資料を全部見せていただいた中で、気になったことがある。この授業を受けて、子供たちの考えは40人いたら、40通りある。正解がない答えを導き出すということで、道徳の評価をどのようにみていくのか。大人は、悪いことは悪いという教え方をするが、先ほど教科書を見たら、2通りの答えがでるものがあつた。双方の見方を答えるというところで、最終的な答えがどういうふうになるのか。道徳は成績が付かないのですよね。保護者も子供たちにどういうふうな教え方をすればいいのか。道徳を受けた評価に対して、子供たちの対応をどのように見ていけばいいのか。

・藤井校長

この度、教科になる流れがあるが、道徳では、どういうふうな学習をするのか、教科書の最初には説明があるが、評価について保護者代表からの質問であった。

・山下校長

昭和33年に道徳の時間ができて、色々変遷がある。その中で、「道徳の時間が好きか嫌いか」と聞くと、「好きだ」と答える子は、道徳の答えは、一つではない、人と違っていい。色々な考えを言ってもよいから好きだという。「嫌い」と答える子は、分かりきったことを言わせてそれでいいと言われたら、やらなくて良いではないかという意見を持つ。

問題なのは、表面上の問題で選ぶのではなく、なぜそれを選んだのか、なぜそう考えたのかを

本当は議論する必要がある。表面上の価値でAとかBとか答えるのではなく、道徳は、自分の生活体験から選んでいる。いろいろ意見があることを、今度教科になった一つの理由は、しっかり議論して、根っこにある考えは何かを気付くことが一番大事である。それが、子供たちが将来生きていく上での判断のものの考えを作ることになる。今回の道徳の大きなねらいである。

今までは、どちらかというとならで、価値として分かりきったことを教えるような指導があったわけで、そうすると面白くない。「その通りです」と言っても、「自分は正しい」と思ってもできない子もいる。なぜ、できないかを考える必要がある。お互いの考えの違いがあっても、そう考えれば自分もできるようになるかもしれないというふうに根っこの部分をどれだけ掘り下げるかということである。

問題について、しっかり考えた上で自分の考えを持っている、そして表現するかを先生がどれだけ見取るかということである。内面だから難しいけれど、授業の中で自分の考えをしっかり持たせる、そして、なぜ、どうしてと深めていく道徳の時間をつくっていく。道徳性を高めていくために必要である。

根っこの部分をどれだけ掘り下げるかである。しっかり子供たちの道徳性を高めることができたのかであり、しっかり考えて自分の意見をはっきり表現できたかが、一番の評価になる。そうすると、家でも「今日、僕はこう言ったら、〇〇君は、～な意見だったけど、自分はこう考えた。おかしかな。」というような会話が出てくれば、その子はすごいなあと思っている。

・藤井校長

道徳的な判断力をしっかり付けていくということである。答えが一つではないという一例であるが、服装が似合うか似合わないかという場面がある。思いやりをもって言わない場面もある。その人との人間関係の距離によって、正直に言える場面と言えない場面もある。今までの道徳は、どちらかというとならで正直に言わなくてはいけないという授業をやっていたことがあった。しかし、生活の中では、答えが状況によって変わることもあるということ。理由や根拠を大切にすることを追求していきたいという思いがある。

大変ありがたい意見であった。評価についても、しっかりと各学校の方で留意しなければいけない視点をもらった。

・西村校長

話が戻るが、別冊があるところは、採択はしないという発想なのか。中身が大事。確認しておきたい。

・藤井校長

私の解釈では、最初に「一つずつの観点に傾斜配分はない」と整理された。別冊もその観点の一つという捉えである。その観点で、得点が入らないということの解釈で良いか。全てがだめだという解釈ではない。それで良いか。

・山下校長

視点⑦の中では、今のような意見が出た。他の観点は、独立している。

・藤井校長

別冊については一つの観点としてない方が望ましいということのみでいいということが、全体の中で決まった。「いじめ・情報モラル」の「ユニット」の考え方など、次に見直すか修正するか、文言として考えていく部分ではないかと思う。例えば、全学年においてなされているのか、各学年なのか掘り下げる、「ユニット」についての考え方を具体的に書くという方法もある。また、「判断基準はどこが境目なのか」という意見があった。判断基準が、はっきりと分かるような文言を入れていけば、次の選定委員会に向けてより良くなるのではないかという意見が出された。その他、振り返り、評価についても意見が出された。修正・文言については、今のような形で意見が集約されるのではないか。私のまとめ、その他のところで、御意見ありましたら、お願いしたい。

・吉長教授

感想を1点述べる。別冊の部分を観点の一つとして評価するというので、安心した。今回は、特に小学校5年生対象の教科用図書を中心にみた。孫と一緒に読んでも良い内容が結構あった。子供向けだけでなく、家庭で活用できるなど思った。チェーンメールなどがあったが、社会的意義がある内容だと感じた。

福祉という言葉の字源辞典でひいてみると、どちらも「幸せ」という字である。福祉の「福」は、介護保険あるいは健康保険などの社会的な幸せ。福祉の「祉」は、制度ではない、個人的な幸せ。つまり、社会的な幸せと個人の幸せというのが、道徳の中で培われていくのだなと感じた。非常に良い機会をいただいた。お礼を申し上げたい。

・山本委員

親子で使える教材が新しくできたという感がある。自分で考える力を付ける教材によい。親子で話し合える新しい教科という認識で考えてみたので、学校だけでなく、親子でできる勉強を確立していけたらと思う。

・藤井校長

長時間にわたり議論いただき感謝する。次回までに、評価案を加筆・修正し、再度提案いただく。今回は8月17日である。全ての議案が終了したので、事務局に返す。

協議終了。

川原主任指導主事が次回以降の予定について確認して、会を終了した。

第3回呉市教科用図書選定委員会 会議録

日時	平成29年8月17日(月) 9:00~11:00			
場所	呉市生涯学習センター(つばき会館4階) 407・408号室			
参加者	呉市立小学校長会長	藤井 敏彦 (呉中央小)		
	選 定 保 護 者 代 表	山本 浩司 長井 久美		
	学識経験者	吉長 成恭		
	委 員 会 校 長	前田 直子 (坪内小)	西村 正順 (荘山田小)	
		高橋 智子 (音戸小)	片岡 邦夫 (港町小)	
芳川 雅行 (郷原小)		仙田 和子 (昭和北小)		
山高 正樹 (広小)		堀田 由美 (本通小)		
藤平 高憲 (安登小)		山下 伸一 (阿賀小)		
教 育 委 員 会 事 務 局	学校教育課長	高橋 伸治		
	学校安全課長	金本 康司		
	学校教育課課長補佐	安部 ほずみ		
	学校安全課課長補佐	栩田 隆志		
	学校教育課 主任指導主事	川原 亜弥		
指導主事	田村 峽平			
傍聴者	教育委員 水野 良行 教育委員 香川 治子 教育委員 船尾 慎			
内 容	1 第2回選定委員会での協議の確認 2 議事 (1) 平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見(案)について			

委員会は定刻に始まった。

1 第2回選定委員会での協議の確認

・藤井校長

審議に入る前に、第2回選定委員会での協議について確認する。

このことについて、事務局から説明をお願いします。

◎事務局説明(安部課長補佐)

安部課長補佐より、第2回選定委員会の協議結果について確認する。協議内容は、「平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見(案)」について、道徳部会代表の山下校長から提案があり、それについて委員の皆様から、御質問や御意見をいただいた。

それを踏まえて、選定委員、道徳部会代表の山下校長が加筆・修正したものが、本日机上に配付している平成29年8月17日付け「平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見(案)」である。この後、山下校長から提案していただく。

・藤井校長

ありがとうございました。ただ今の説明につきまして、御質問や御意見をお願いします。

◎事務局の説明について、質問や意見はなし。

2 議事 平成29年度呉市教科用図書選定委員会総合所見(案)について

・藤井校長

それでは、本日の議事に移る。先ほど事務局から説明があったように、道徳部会代表の山下校長が8月7日に説明した「総合所見(案)」を加筆・修正した「総合所見(案)」について検討していく。本日は、教育長に報告する総合所見を完成させるのでよろしくお願いいたします。

それでは、「総合所見(案)」について審議する。審議の前に、前回同様に、「総合所見(案)」を読む時間を取りたい。先程事務局から説明があったとおり、前回の協議を踏まえて加筆・修正した箇所を中心に見ていけたらと思うので、主な変更点について、説明していただく。

・山下校長

「総合所見(案)」の後半のA3の資料を御覧いただきたい。

前回協議していただいたことを踏まえて、加筆・修正した箇所は、1枚目、観点1の視点③、3枚目、観点3の視点⑦、⑧、そして5枚目観点5の視点⑫である。まずはそれらを中心に読んでいただきたい。

・藤井校長

それでは、今説明していただいた箇所を中心に、資料を読む時間を取る。9時20分まで各自で資料を読んでいただく。

◎ 総合所見(案)についての資料を、各自読む。

・藤井校長

それでは、道徳部会代表山下校長に説明をしていただく。

・山下校長

「特別の教科 道徳」の「総合所見(案)」について説明する。

第2回選定委員会を受け、調査・研究した内容について、各発行者の差違をより明確にした方がよい視点や、もっと詳しく説明した方がよい視点について、説明する。

途中、教科書を見たり、必要であれば、お手持ちの資料に書き込んだりしながら、各発行者の違いを見ていただき、後ほど十分協議をしていただきたい。

A3判縦の観点別の資料の観点1「基礎・基本の定着」を御覧いただきたい。

前回、観点1を取り上げて説明はしなかったが、視点①～③について説明する。

まず、視点①「道徳科の学び方の示し方」については、光村は第2学年以上で、その他の発行者7者では、全学年に1～8ページ程度のオリエンテーションのページが設定されている。ここでは、児童が学び方をイメージしやすいイラストを用いている東書、学図、光村、日文、光文を「優れている」とした。

次に視点②「主題名の示し方」については、児童が学習内容のイメージをもちやすいように、教材ごとに主題名を分かりやすく示している学図、日文、光文を「優れている」とした。

また、視点③の「ねらいに迫るための発問の示し方」については、前回質問が出ていたので、詳しく説明させていただく。視点③については、全ての教材の決まった箇所に適切な数の発問があった方が児童にとって学習の見通しを持ちやすいとの考えから、東書と学研を「優れている」とした。この点について、他者との差違が分かるように記述の仕方を修正しているので、その点について説明する。東書第6学年の43ページの最後、黄色の破線囲みの中を御覧いただきたい。東書は、全学年、キャラクター「こころん」とともに、発問が記載されている。第1・2学年は、教材名の下に1個、第3学年以上は教材文の終わりに2個ある。次に、学研の第6学年29ページの最後、枠囲みの中を御覧いただく。学研は、全学年とも、教材文の後の「考えよう」に2個発問を記載している。問題解決的な学習として扱っている教材については4個記載している。

以上のことから、観点1においては、東書、学図、日文、光文を「優れている」とした。

次に観点3「内容の構成・配列・分量」について御覧いただく。

視点⑦の「分量や内容項目の数」については、児童にとって判の大きさが扱いやすいことと、発問に対して書き込む欄等が示されている別冊がない方が、学習展開や年間指導計画を柔軟に設定しやすいのではないかとの考えから、東書、教出、光文を「優れている」としていることは、変わっていないが、それらのことをより分かりやすくするために、記述の仕方を変えているので、御確認いただきたい。

視点⑧「現代的な課題等を踏まえた内容の示し方」については、前回より詳しく説明する。「いじめ」に関する教材は8者とも全学年で扱っているが、「情報モラル」については、全学年で扱っている者と第3学年以上で扱っている発行者がある。「いじめ」及び「情報モラル」に係る教材ともに全学年で扱っている方が、発達段階に応じた指導ができるとの考えから、東書、学図、光文、学研を「優れている」とした。参考として、東書1年106ページを御覧いただく。題名の上に「じょうほうモラル」と示してある。高学年におけるパソコン等を使ったものではないが、発達段階に応じたものを取り上げている。続いて光文の1年46ページを御覧いただく。題名の上には「じょうほうモラル」と示してある。1年生から取り上げている。「いじめ」については、130ページを御覧いただく。「ちびまる子ちゃんとかんがえよう！」という素材を使って「みんななかよし たのしいがっこう」と示している。

以上のことから、観点3においては、東書、光文を「特に優れている」、学図、教出、学研を「優れている」とした。

次に観点5「言語活動の充実」について御覧いただく。

視点⑩「自分の考えを伝え合う活動の工夫」については、より考え・議論する道德の時間にしていくために、それぞれの教材に話し合いを促す発問や活動が示してあると効果的に話し合い活動を進めることができるとの考えから、学図、教出、日文、光文、学研を「優れている」としていることは、変わっていない。

ここでは、視点⑫について、前回より詳しく説明させていただく。前回、学期に1回程度の振り返りがあれば、児童自身はその成長に気づきやすいのではないかとの考えから、東書、日文、光文を「優れている」とした。まず、東書について、第1学年109ページ～110ページを御覧いただきたい。このように、東書の第1学年は、学習後に教材名に色塗りをする振り返りと、2学期からは、学期ごとに心に残ったことなどを記述する振り返りができるようになっている。参考として、東書の第6学年183～185ページを御覧いただきたい。第2学年以上は、自らの学びや成長に気づくことができるように、振り返りとして考えたことや学んだこと等を学期ごとに記入できるようになっている。日文については、別冊6学年の2ページ、3ページを御覧いただきたい。別冊ノートに毎時間の学習について○を付けて自己評価する欄がある。それから、巻末41ページを御覧いただく。このように、どの学年にも、「道德の学習で学んだことを書きましょう。」が設けてあり、心に残った話とその理由や保護者の一言を第2学年のみ2つ、他の学年は4つ抜粋して記入できるようになっている。光文第1学年の巻末を御覧いただく。巻末に「まなびのあしあと」を折り込みページで設けてある。このように、第1・2学年は、毎時間の授業後の気持ちを顔マークで、第3学年以上は矢印で表すようになっており、学期ごとのまとめが書けるようになっている。第6学年の巻末の折り込みを御覧いただきたい。このように、第3学年以上は矢印以外に、一言を記入する欄と、学期ごとの振り返りを記入できる3箇所の「まとめ」の欄があり、自らの学びや成長に気づくことができる工夫がある。

以上のことから、観点5においては、日文、光文を「特に優れている」、東書、学図、教出、学研を「優れている」とした。

「総合所見(案)」についての説明は以上である。

・藤井校長

今、観点等について詳しく説明してもらったが、御質問、御意見等があったら願います。

・片岡校長

今、山下校長から説明があったが、評価について妥当性があると思う。しかし、総合所見で読み取りにくい。観点2の光村と日文では、説明量は日文より光村が多いのに「特に優れている」のは、日文である。このようなものが他の観点でも見受けられる。評価が分かる表現が必要ではないだろうか。ただし、今から書きぶりを変えることは難しい。アンダーラインを入れるような工夫が必要ではないだろうか。

・藤平校長

説明していただきとても分かりやすかった。観点2, 観点4について同じように説明してほしい。

・藤井校長

片岡校長より、説明文章の分量について意見があった。分量が少ない方が「特に優れている」。目で見てアピールする必要はないのかとの意見であった。

・山下校長

分量について、別冊があるものは、2冊分の記載が必要であり、量が増えている。

・片岡校長

量的なことについて変更は難しいと思う。アンダーラインを引くなど質的なことが見える形はどうか。

・芳川校長

どこで区別していくのか分かるような記述が必要だと思った。どこで判断したのか分かるような記述があればいいと思う。

・藤井校長

表現について意見が出ているが、文章を一読しただけで「特に優れている」、「優れている」が分かるような工夫が必要ではないかという意見、あと観点2, 観点4の説明をしてほしいとの意見が出ているが、その他関連した意見はないか。

・西村校長

今、観点ごとの表記の仕方について出ているが、これは質問だが、山下校長から視点ごとの説明があったが、これは表記されていない。これは載せる必要はないか。そうすると観点1についても納得できるのではないか。

・藤井校長

観点ごとの評価は表記されているが、視点ごとについて評価が明記される必要があるのかとの意見だったが、いかがか。

・山下校長

調査・研究においては、5つの観点、12の視点それぞれのことについて、調査・研究委員が細かく調べている。調査・研究委員は客観的な事実を並べ、私の方で各視点について確認し、そのことを観点ごとに評価させてもらっている。

・藤井校長

選定委員会が始まる時、5つの観点で評価していくことを確認した。視点も大切ではあるが、そういった意味では一つ一つの視点よりも観点で評価することが良い方法である。もし、意見があれば再考したいと思う。再度申し上げるが、選定委員会が始まる時5つの観点で評価していくという確認をした。

・西村校長

私は、違いが分かりにくいという皆さんの意見があったので述べたのであって、観点ごとの評価を行うという確認がとれば納得である。

・藤井校長

評価については、観点ごとに行うことでよろしいか。(了承される。)

それでは、観点2と観点4について再度説明してもらいたい。

・山下校長

では観点2「主体的に学習に取り組む工夫」について御覧ください。

第2回の選定委員会で説明したものを加筆・修正はしていない。前回の説明と同じになるが、視点④「問題解決的な学習を取り入れた工夫」については、児童が自ら進んで考えてみようという気持ちになるような工夫があり、学習の見通しがもてるものがよいとの考えから、東書、日文、学研を「優れている」とした。前回は、日文、東書5年生の教科用図書を示した。

視点⑤「体験的な学習を取り入れた工夫」については、役割演技や動作化を取り入れるなど、体験的な学習を効果的に位置付けることで、児童の道徳的価値の理解は一層進むとの考えから、教出、光村、日文を「優れている」とした。

視点⑥「自己の生き方につなげるための工夫」については、実生活に生かすための具体的な働きかけがあると、自己の生き方につなげて考えやすいとの考えから、東書、学図、光村、日文、光文、学研を「優れている」とした。

以上のことから、観点2については、日文を「特に優れている」、東書、光村、学研を「優れている」とした。

次に観点4「内容の表現・表記」について御覧ください。

視点⑨「巻頭・巻末等の取扱いの工夫」については、巻頭に目次があり、教材名とともに、4つの視点「自分自身」「人との関わり」「集団や社会との関わり」「生命や自然、崇高なものとの関わり」が示されていることや、巻末に振り返りが示されていることから、活用しやすいと判断し、東書、日文を「優れている」とした。

続いて視点⑩「教材の内容を理解させる工夫」だが、キャラクターを活用し、教材をより理解できるように工夫が見られた。マークに統一性が見られ、効果的に利用されている点から判断し、東書を「優れている」とした。

以上のことから、観点4では、東書を「特に優れている」、日文を「優れている」とした。

・藤井校長

今、観点2と観点4の説明をしていただき、これで全ての観点の説明をいただいた。その他の御質問、御意見があればよろしく願います。

・山高校長

観点3についてだが、第2回の選定委員会では、視点⑦については、別冊の扱いについて十分協議したが、先ほどの説明でも別冊はなしで評価されたが、優れた発行者が東書、教出、光文だったが、例えば、光村も学研も別冊はないのだが、優れている者と優れていない者をどうやって判断されたのか。

・山下校長

判の大きさも考慮した。

・山高校長

光文も学研も同じではないか。

・藤平校長

光文と学研はA4判と書いてあるが、光文はA4変形判である。

・西村校長

山高校長の質問の意味は、なぜ、3者を選んだのかということである。極端なことを言えば大きさが微妙に違うからということではないと思うが。

・山高校長

光村でいえば分量が多いということで読み取れる。そういう読み取り方をしないといけないのかなと思った。

・山下校長

この度、調査研究委員の方で視点⑦に関わって、発行者によっては文字が小さい、イラストが大きいなど意見として出ている。

・山高校長

視点の評価の話に戻るようになるが、なぜ違うのか、微妙なところも分かるように同じようなものについては同じように表現する必要がある。

・藤井校長

各視点の判断については、明確に分かるような表現に修正することも必要ではないかという意見をいただいている。今、視点⑦のところだが、前回別冊のあるなしの論議をして、別冊がない方がよいであろうということで全体では判断をいただいた。それ以外でも光文、学研を見た時にほぼ同じような書かれ方で、分量や教材が適切であるという箇所では一方が○が付き、一方が○が付かないというような場合、具体的な差違が分かる方がよいのではないかという方向性が出されているが、視点⑦の文言については、もう一度資料等見直してまた考えるということによいか。調査・研究内容の具体的な話をしていただければ○が付いているか差違は分かるのだが、この文言からは分からないということだ。分かるような記述をしていくという御意見をいただいているので、これについては修正という方向性でいいか。

観点3 視点⑦については、修正の方向性で進めていきたい。

・西村校長

観点1に戻るが、視点③は、「ねらいに迫るための発問の示し方」についてだが、子供たちが教科書を見た時に、この教材では何を勉強するのか、どんなふうを考えて学ぶのかというような見通しをもつために、発問が示してあることは大切なことだと思う。先ほどの説明でよく分かったが、教材ごとに発問があると、子供たちにとって見通しがもちやすいと思うが、発問の数が多すぎると、子供たちが、今日は何について勉強しているのか分かりにくくなって、ねらいに迫りにくくなる場合もあると思う。だから、この視点については、東書や学研が使いやすいということによいと思う。

・藤井校長

判断基準が適切であるという意見をいただいた。

その他いかがか。

・片岡校長

これも感想だが、発問についてはとても大切だと思う。しかし発問が妥当かどうかの吟味は難しい。

・山下校長

その吟味は、文部科学省の検定を通っているということで判断した。

・片岡校長

これは、参考だが、記載されている発問は、一つのモデルとして示されていると捉えてよいか。

・山下校長

はい。

・藤平校長

別冊のあるなしについても発問との関わりについて記述があったので、そういう意味では、工夫されている方がよいという結論だったので、参考にするというでいいと思う。

・藤井校長

発問については前回から論議をしていただいている。今のような形で進めていきたい。

その他いかがか。

・山高校長

観点3の視点⑧「現代的な課題等を踏まえた内容の示し方」について、意見を言わせてもらう。調査・研究の視点を決める時にも、かなり議論して、「いじめ」だけでなく「情報モラル」に係る教材についても調査・研究してもらうことになった。だから、これら2つの扱いについて各者に違いがあるなら、先ほど説明があったように、「いじめ」「情報モラル」とも、第1学年から第6学年まで発達段階に応じた系統的な扱いをしている東書、学図、光文、学研が「優れている」というところでよいと思う。

・西村校長

今の、全学年で扱いがある東書、学図、光文、学研では、特徴的なところでいうと、どのような違いがあるのか。

・山下校長

東書の第1学年の目次を開いていただきたい。東書は、ここにもあるように、全学年で「いじめのない世界へ」というユニットを設定しており、重点的な扱いができるようになっていっているところが特徴である。中身については42ページ「いじめのないせかいへ」というユニットにある「ダメ」という教材だが、おやつをモチーフに直接的にいじめを「苦しい」とか、「しんどい」とかではなく、友達関係など、子供の生活に近いものを取り上げている。これが東書の特徴である。また、目次にあるように「情報モラル」についても、ユニットがあり、発達段階に応じた指導がしやすいということが言える。

学図の1年生の65ページにも「上手にさそおう、ことわろう」という題材の上に「ことば・じょうほうモラル①」というように示してある。友達を誘うとき、断り方など人間関係を例にして取り上げられている。これはコラムといった形で示されている。91ページには「ことば・じょうほうモラル②」がある。発達段階に応じた指導がしやすいということが言える。

光文は、「いじめ」に関しては、「ちびまる子ちゃんと考えよう!」というコーナーを設けるなど、子供たちが考えやすく、接しやすい。4年生の158ページ「みんななかよし楽しい学校」というテーマで系統的に取り扱えるようになっていっている。学研も3年生・4年生では「友だちとなかよく」というユニットを設けている。中学年で重点的な取扱いができるというのが1つの特徴である。いじめにおいても子供たちの生活の広がり等、配慮した教材が各発行者とも工夫されている。

「情報モラル」については、直接、携帯電話やパソコンの教材ではないものが低学年にあり、そこから徐々に携帯電話やパソコン等を取り上げていく教材が工夫されている。

・西村校長

東書の1年生の「じょうほうモラル」でかばさんの絵があったが、次に光文の「じょうほうモラル」を見た時に、光文は難しいと思った。特徴といえば特徴。東書の1年生として分かりやすいキャラクターを使っている段階的な指導が見て取って分かる。光文は、最初から「情報モラル」はストレートでたくさんの情報を出している。これが特徴なのだろうか。これは感想である。

・藤井校長

具体的な内容・表現まで見ていただいた。

・前田校長

1つは質問、1つは意見だが、各観点同じように扱うのは分かるが観点の中の視点の比重については、最初に確認して重きは全部同じように置くのだったのだろうか。例えば、2つの視点がある場合、50%、50%なのか。今は、それで付いている。○が二つあったら二重丸という形で付いていると思うが、それで良かったのかという確認ともう一つは、説明の中で視点と方法は示してあるが、山下校長が発せられる言葉から、判断となる根拠だとか概論、8者に共通する概説だとか、このような判断基準で決定したということがよく分かる。そこを明記することはできないのか。

・藤井校長

観点、視点の比重、明記についての意見が視点については、1回目の時に話があり、同じ比重で行うことを確認している。それでよいか。

より分かりやすい記述についてだが、このことについてはどのように考えたらよいか。今、A3のまとめたものと総合所見の扱いについて出てきているのではないかと思うが、御意見はいかがか。

・西村校長

実際、どこまで考えたらいいのか。

・藤井校長

今、スタートして1時間30分が経ったので問題の途中だが休憩を取らせていただく、その後この問題と全体を通した最終審議を行いたいと思う。こちらの時計で40分まで休憩をさせてもらい審議を再開する。

(休憩)

・藤井校長

それでは再開する。先ほどの判断基準について分かる形で明記していけばとの意見があった。それについてはいかがか。

・西村校長

調査・研究委員が視点をもとに事実のみを示しまとめている。差違を付けようと意図をもってやっているわけではない。よって、これらをさらに細かく求めることはどうであろうか。これをもとに総合的に判断した方がいいと思う。

・藤井校長

総合的に判断するという御意見をいただいたがいかがか。

・藤平校長

丁寧に見直してみたのだが、文章の中に特徴を表すようなキーワードが示されている。意図的に文章が作られている。それらをもとに判断したと考える。特徴的なことが文章に挙げられており、今の記述を総合的な判断をしていけば選ぶことができると思う。この記述でよいと思う。

・藤井校長

その他いかがか。

・高橋校長

視点⑩「自分の考えをまとめたり、振り返ったりする活動の工夫」については、先生方は、もちろん教科書にあるものだけに頼らず、様々な工夫をしていると思う。例えば、1学期ごとの大きくくりでの振り返りでよいと考えて、東書や日文、光文が適切だと思った。しかし、今、これだけを見ただけでは判断ができない。説明やこれまでの話を聞いていけば理解はできるのだが、もしかしたら教出でもいいのかな、文言を見ただけでは区別が難しい。工夫されているという文言があれば分かるのだが、事実だけなら分かりにくい。どこを基準にして判断したのか先ほどから出ていたが下線を引くなどよく分かるようにしてあると、だから東書がいいんだな、日文がいいんだなと分かると思う。

・藤井校長

総合的な判断をしていこうという意見ともう少し下線等も含めて明記した方がいいのではないかという意見が出ている。

・西村校長

どの発行者も工夫はしている。そうすると子供にとって扱いやすい、学習しやすいと判断するのは私たちであり、どうしても主観が入ってしまう。例えば、こういうふうになっているので使いやすいと記述してあるとそれが判断になってしまう。あくまで調査・研究委員は、使いやすいとは書けない。分析しているだけである。アンダーラインならなるほどと思うが。

・芳川校長

主観が入るような書き方はしてはいけない。事実をもとに説明すべきである。

・藤井校長

客観的に表現するということですね。となるとアンダーラインも主観か客観かとなるととても難しい問題になる。調査・研究してきたことについて論議、審議してきたのでこの文言についてはそのまま、その他、修正するところがあれば修正し、今の文言で総合的に判断していくということではどうか。

・全員

はい。

・藤井校長

この形で報告していくことで進めていく。全体を通して御意見をいただければと思う。

・山本会長

長時間にわたり審議をしていただき、いろいろな意見を聞かせていただいた。私が一番思ったのは観点5の視点⑩、子供たち同士で意見を考え議論するということについてである。先生の意見を聞くわけではなく、自分たちの考えを発表し、生かしていくということが、今回の「特別な教科道徳」で一番必要な部分だと思う。教科書に関しては、全部素晴らしいと思うので、選定で一番悩むのは、保護者的な考えではあるが、子供たちが自発的に意見を出し、それを生かしてもらうのが一番だと思う。内容的には全て素晴らしい教科書であるのでそれを先生と児童がどう生かしていくかだと思う。道徳的な考えは、これまで社会や国語などでのやっけてきていることよりも深い。よってこれからの成長の過程で生かしてほしい。

・藤井校長

新しく教科書としてこれを扱う私たち教職員が工夫し今後を生かしていきたい。

・吉長教授

今回、選定委員会に参加させていただいて、まず調査・研究委員会の方々の御苦勞をねぎらいたいと思う。大変御苦勞様でした。そして、観点、視点あるいはその方法論について定性的あるいは定量的な評価が、非常に前回、今回と分かりやすく、各者の特徴の表出はできていると思う。私は、公共サービスの民間事業者の調達を行ったりするが、定量的・定性的に細かく微分をしていくわけだが、最後、微分をし続けても微分が川の向こうまで届かないのが現実であり、それをどのように合議し報告するかが課題である。そこには、担当者の総合的な判断を参考にしてその委員会が納得するという点で届く。議論を尽くすだけ尽くすということは微分を細かくしていくことだと思うが、最後の的に届くところは事実なのでそこを総合判断にしていけばいいと思う。

・藤井校長

ありがとうございます。それでは、総合的な判断について山下校長にお願いします。

・山下校長

皆さんと審議してきたことを総合的に見ていくと、全観点において高い評価は、東書それに続くのが日文と光文となっている。以上のことから東書を「特に優れている」、続いて日文、光文が「優れている」というように選定委員会の案としたいと思う。

・藤井校長

審議をいただいた形で私の方が教育長に報告したいと思う。

ただし、審議の中で観点3視点⑦については若干文言について加筆・修正したものを後日教育長に報告する。その点は、良いか。よろしかったら拍手をお願いします。

(全員拍手)

・藤井校長

ありがとうございます。承認されたものとみなす。

以上で本日の議題は終了する。皆様の御協力に感謝する。

協議終了。

川原主任指導主事が資料の取扱いについて確認し、会を終了する。